

2. 学僧? 然 ものがたり

<? 然とは>

- ・ ? 然は、江戸文化の円熟期を迎えていた寛政 8 年（1796 年）に生まれた。
 - ・ 大山寺の僧侶として修行をする傍ら、書画の才能に秀でて学僧として生涯多くの作品を地元に残している。晩年、大山寺を下り風流三昧な生活を送ったと伝わっているが、人物像、修行の様子、墓所さえはっきりせず謎に満ちた人物である。
 - ・ 謎多き人物であるだけに、なぜか魅力を感じさせる。

 - ・ 文化 3 年（1806 年）当時 11 才の時、大山寺に上がり観解院に入った。翌年、剃髪して仏門に入り台貫と名のつたという。師の円流院主台賢は、当時の大山において最も優れた学僧で、大山寺境内に残る供養塔や銅鐘の金石文にも名を残す功労者であった。
 - ・ 台貫（? 然）はよき師を得て仏学に、優れた詩文書画ともに才能を伸ばすことになる。
- ☑ 伝承者 畠中広氏：? 然書画集
- ✓ 二世紀半に及ぶ大山寺近世史は、数々の英僧、学僧を生み出した。
 - ✓ その中であっても、もっとも庶民に知られ、愛され、親しまれたと人はといえば、やっぱり? 然があげられる。

 - ・ ? 然は、「千枚書き」と呼ばれるほど数多くの書画をこの世に残している。
 - ・ 僧侶としての修行の傍ら山を下り、伯耆一円と安来を中心とする出雲東部の豪農豪商のもとで多くの書画を描いた。いわば、大山を見ることのできるごく限られた地域の人々から求められ、絵画を残した土着性の高い画家と言える。

<? 然は何を求めたのか>

- ・ ? 然の人柄を物語る伝承に次のようなものがある。
 - ✓ ある人が、? 然に大山寺山内の人数を訪ねたところ。
 - ✓ 彼はただ三人だけであると答えた。すなわち、一人は洞明院の大若（禅信）、もう一人は自分、他の一人はその他数十百人をまとめて一人だと。
- ・ このような言動が受け入れられず大山寺を追われたとの説もある。

- ・ 江戸時代後半にさしかかり、庶民文化が広がりを見せていた。地方の豪農や豪商は、書画を求める気運が高まっており、京から絵師を迎えて絵画を描かせるものも現れた。
- ・ 絵師という職業が確立されてきた時代であり、漁師の息子が絵師になる夢を持っても不思議ではなかった。自叙伝にもあるように、彼は 6 才にして早くも絵心があり、指で砂に馬を描き、爪で壁に牛を刻したという。そして絵に対する思いが、ますます深まり、ついに 11 才で大山に登ったとある。
- ・ 絵の修行には、画材の購入などかなりのお金がかかり、修行をしながら生活するためには大山で学僧となるのが最も良かった。
- ・ 彼の大きな志は絵の道を究めることであった。
- ・ そして、修行の地「大山」で出会った仏教の教えと彼の美術的なセンスが融合して百五十年以上立っても人々を魅了する独自の世界を作りあげたのではないだろうか。

- ・ 今の世の中であれば、ごく自然に受け入れられる？ 然の言動も、江戸時代、それも大山寺の常識からすれば、かなりかけ離れていたことは容易に想像できる。
- ・ この自由奔放さが現代の我々に魅力を感じさせるところなのかもしれない。

< 皆生と大山をつなぐ？ 然 >

- ・ 自叙伝によれば、？ 然は寛政 8 年（1796 年）9 月 23 日夜、皆生村の漁師の家に生まれたという。父は多吉、母は阿岩といい、八幡氏と称している。
- ・ 当時、皆生（海池）村は戸数約 70、人口約 300 の半農半漁の海岸であった。皆生で八幡氏と言え、天正年間（1580 年代）皆生を開墾した八幡新兵衛の一族であろう。もとをたざせば平安時代に大智明権現社を寄進した紀成盛の一族であるといわれている。

☞ 伝承者 清水谷登氏：中国新聞「大山探訪」

- ✓ 嘉永 3 年（1850 年）？ 然 55 才の時に大山を離れた。
- ✓ 日野川岸の八幡村の末次氏を頼って草庵を営み「六奇楼」と名付けた。自らを「迎嶽観主人太虚」と号し、風流三昧の日々を送ったとある。

- ・ 梅翁寺に残る過去帳によると父多吉が天保 13 年（1842 年）母阿岩弘化 3 年（1846 年）兄弟である良吉が嘉永元年（1848 年）相次いでなくなっており、この身内の死が大山を離れるきっかけとなったのかも知れない。

☞ 伝承者 大原俊二氏：「？ 然書画集」

- ✓ ？ 然は弁当箱と称される漆塗りの箱がある。
- ✓ 蓋の裏側に黒漆地に金蒔絵で蟹の泡を吹く図が描かれている。引き出しの底もやはり、黒漆地でその上に朱で次のような画賛（現漢文）がある。

むちょう ねんごろ
無腸の公子、座営は 慳 に

ずいしょ おうこう かくすい しつ
随處に横行す、客水の湿

じゃくつせんけ さりゅう す
蛇窟？ 家、砂流の洲、

まんせん これ ぼうきん
萬千の玉を吐くは是、房金

- ✓ 「蟹は自分の座るところを作ることについて非常にていねいで、にわか雨で不意の増水したあと、気持ちよさそのような湿気のある場所を探して、あちらこちら勝手気ままに歩き回っている。そして、探し当てた蛇や魚の棲む流砂でできた洲のほとりに居候をきめこんで、玉のように美しい泡を吹き出しては、それを宿代がわりだとは、面白い。」
- ✓ 「無腸公子」すなわち「蟹」？ 然自信の象徴である。一生の念願である画道を追求して、大山寺における僧務の余暇にたくさんの「玉」を宿代にしながら「随處に横行」するという所信を述べている、そして「玉」とは？ 然の画く絵であろう。

- ・ この詞を読むと？ 然が幼少の頃、皆生の砂浜に指で馬の絵を描いていた光景が浮かんでくる。

< 弥山禅定の秘密 >

- ・ 大山は、山自体が信仰の対象であり、神聖な場所として登ってくる人たちを浄める仕組みがつくられていた。特に、大山の山頂は、最も神聖な場所とされ、明治時代になってからも一部の宗教的な行事を除いて山頂への登山は認められていなかった。
- ・ 江戸時代まで大山山頂で行われていた弥山禅定という行事がある。

☑ 伝承者 ? 然 : 「大山雑記」

- ✓ 新しく選ばれた行者二名は、毎年 5 月にお堂に入り、法華経をそれぞれ写経する。
- ✓ 6 月 14 日の夕方、先導者三名と共に山頂に登り、写経したお経を納め、15 日の朝に下山する。これを弥山禅定という。

- ・ 以前に登ったことのある行者と共に 5 名で山頂を目指したようである。毛筆や膠墨を使わず、稲穂の心の部分で筆を作り赤土を墨に見立てて写経を行った。

☑ 伝承者 大館禅雄氏 :

- ✓ 将来有望な僧侶が行者として選ばれ、いわば若手僧侶の登竜門的な場ではなかっただろうか。選ばれた行者は、阿弥陀堂に籠もって写経を行った。
- ✓ 写経の間、行者たちは自らの僧坊に帰らず、釈迦堂跡の上にあった天狗屋敷というお堂に寝泊まりした。弥山禅定の経路は、現在の釈迦堂跡から五合目の辺りに抜ける道があり、その道を登り弥山を目指したという。
- ✓ 墨の変わりに使った赤土であるが、自分が先代住職である父親から聞いた話では、下山キャンプ場にあるモミノキの根っこから掘り出して使ったと聞いている。自分も行ってきたが確かに土を掘った後があったと語る。

- ・ 弥山禅定の写経で使う赤土について杉本氏によると。

☑ 伝承者 杉本良巳氏 :

- ✓ 呼滝山（現在の豪円山）の裏山に良質な赤土がでるところがある。
- ✓ その下には鉢跡もあり鉄分を含む赤土が取れたのではないかと語る。

- ・ 赤土を取った場所についてはいろいろな話が伝わっているが、時期によって取る場所が違っていたのかも知れない。

☑ 伝承者 ? 然 : 「大山雑記」

- ✓ 5 人の行者が弥山禅定から降りてくると本社に下りるまでの道に信心深い老若男女が横たわり、その光景は船の棧橋のようである。みんながからだの悪いところを踏んでもらえるように願った。悪いところを踏んでもらうと、病に効くと言われていたからである。
- ✓ 行者たちが山中の草木を取ってきて、その人たちの中に投げ込むと、先を争って奪いあい、天地を動かすほどの騒ぎとなった。この草木を病気のものに飲ませれば、みんな病気が癒え、すべての病気を取り払うことができるという。

☑ 伝承者 大館禅雄氏：

- ✓ 先々代の住職「禅空」(大正11年8月19日没)の話によると。
- ✓ おびたしい人が元谷の河原を埋め尽くし、寝ころんで行者が下りてくるのを待っていたようである。弥山禅定に使った草鞋も人々に配られ、馬や牛の餌に混ぜて食べさせ牛馬の健康を願ったという。
- ✓ 下山のルートは、いわゆる行者谷を元谷に向かい下りてきた。元谷を抜け現在の治山道路を通り、大智明大権現社に弥山禅定の報告を行ったという。

= 歴史から消えた「大山寺」 =

< 明治維新と神仏分離 >

- ・ 明治維新の新政府が宗教政策として掲げたのが神仏分離の方針であった。

☑ 伝承者 大山町誌：

- ✓ 明治8年(1875年)9月30日 古い歴史を持った大山寺も、一片の司令書によって大山寺号廃止という悲運に見舞われた。社殿神具は大神山神社へ、仏体仏具は大日堂(現大山寺本堂)へ、神仏いずれとも区別しがたいのは、破碎して折半されたが、このとき什器宝物など四方へ散逸してしまったものが多かった。
- ✓ 明治9年(1876年)2月14日 伊集院参事からの指令によって本坊であった西楽院も取り壊された。大山の主神として崇敬されてきた智明権現の仏体、地藏菩薩を安置した、大日堂を地藏堂と名をかえ、これを大山寺本堂として再興を願ったが、なかなか許されなかった。

< 大山寺号復活への道 >

- ・ 檀家を持たなかった大山寺の寺坊にとって大山寺号廃絶は、想像を絶するダメージであった。経済的に追い込まれ、大山を離れていく僧侶も多かった。寺男たちが雪室でつくった大山氷を売り歩いて生活の糧としたといわれている。
- ・ 当時のことについては、屈辱的な思いであるためあまり多くのことが伝わっていない。

☑ 伝承者 大館禅雄氏：

- ✓ 伝承者の父から聞いた話として。馬におわれて多くの仏像やお経が大山から持ち出された。宝物もそうであるが、古文書がなくなっていることが残念だ。
- ✓ 紙の質が良くふすまの下張りに使われたという。寺坊を離れる僧たちもあり多くの寺坊が朽ち果てていった。自分の寺を守るのが精一杯で朽ちていく他の寺のことを面倒見る暇はなかった。

☑ 伝承者 清水正憲氏：

- ✓ ほとんど聞いていない。お寺の器物を売って食いつないでいたのではないだろうか。
- ・ 明治34年(1901年)歴史学者沼田頼輔が米子中学に赴任し、大山研究を始め、大山寺を復活させようとする動きがでてきた。
- ・ 明治36年(1903年)10月ようやく大山寺号の復活が許された。11ヶ院を持って大山寺とし、中門院谷の大日堂を大山寺本堂とした。